

最優秀賞

壁の先に見えたもの

早稲田大学系属早稲田佐賀中学校 2年

板垣 仁菜

私は小学校の頃、消極的な性格だった。ずっと学級委員になりたかったが、立候補しても落選して笑われる同級生を見ていると、とても他人事に思えない。私は勇気が出せずにいつも自己嫌悪に陥るのだった。

そんな時、母が「えー立候補して落ちてきたらいいのに。失敗もできない人生より楽しいよ？」などと無責任なことを言うのだ。私は言葉に詰まった。実際、私の母は、三十歳で二度目の大学生になった。私が二歳の頃だった。今も訪ねてくる母の同級生は、随分年齢差がある。人から見れば遠回りの母の人生は失敗なのかもしれない。しかし、居間に飾ってある母の卒業写真は、本当に幸せそうな顔で笑っている。「失敗」って何だろう。誰が決めるのだろうか。三歳になった弟が、私に麦茶を届けようとして、転んだ。届いたコップには麦茶は残っておらず、あたりは水浸しで、弟は情けない顔をして泣きじゃくった。これは失敗なのだろうか。悔しがる弟は何度も

練習して、今は上手にお茶もご飯も運んでいるのだ。私が逆上がりや練習した日々と克服した日の記憶がぐるぐると巡る。その時失敗かどうかなんて誰が決めるというのだろうか。本当に失敗があるとすれば、それは一つだけだ。何もせずに諦めること、言い訳すること、自分を非難する言葉に負けること、誰かを非難すること。私は、心の底から、自分の壁を越えたいと強く願った。

「私は学級委員を目指す」私はそう宣言した。その言葉に呆れた友人の一部は去っていったが、思ってもみない新しい友人が増えた。話したことがない同級生から悩みを打ち明けられたこともあった。そうして迎えた二学期、ついに私は念願の学級委員になったのだった。宣言した言葉が私の環境と行動を変え、長年の夢は現実になったのだ。初めの一歩を越えて、私の挑戦は続いている。うまくいかない日もあるが、本当の失敗は挑戦しないこと。私は今、弟や母のような笑顔に違いない。